

展望

短歌の現在地——鑑賞の鍵——

三沢左右

王即不聽用軌、必殺之。無令出境。

(史記、商君列伝)

王様がもし衛鞅えいこうを採用することをお聞き入れにならないのならば、必ず彼を殺しなさい。国境を出て他国へ行かせてはなりません。

西田太一郎著『漢文の語法』を読んだ。豊富な文例のひとつひとつがおもしろい。端々な現代語訳は、文脈を想像させ、広い古代中国史の世界に投げ込まれるような印象だ。

韓信かんしん、越王勾踐こうせんなどおなじみの人物が登場すると、旧友と再会したようで嬉しくなる。清少納言の〈夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ〉は、『史記』に見える函谷関の故事を踏まえつつ、男女の仲の歌にする機知が楽しい。平安時代の王朝貴族たちは、一首の背後に広がる故事の世界を噂話のように楽しんだことだろう。

翻って現代短歌は、古典和歌のくびきから解放されると同時に、拠って立つ柱を失ったとも言える。読者はしばしば鑑賞に際して、短歌を読み解くための、さながら暗号鍵を探

すところから始めなければいけない。

反芻のたびに増やしてしまうから夏の体は時間だらけ 小島なお『展開図』
馬手と云へり いかなる馬も御さずして
ささの世もをみななりしわが馬手

川野芽生『Jitsu』

気が付いていないのだからソイラテのカップに書かれた文字のことすら

中島裕介『Memorabilia/drift』

一首目、主客のゆらぎや高い象徴性で、ときに難解さを感じさせる小島なおの作品だが、「時間」というテーマと固く結びついた私性が、一首一首の重層性を読み解く鍵となる。読み解くというと難しく聞こえるが、読者に「感じ」としてすんなりと一首を受容させる手際が卓越しているのだ。

二首目は歌集タイトルともなった川野芽生の連作『Jitsu』冒頭の一首。神話や西洋絵画のモチーフを軽やかに詩に昇華する川野の女性性、ジェンダーといった問題意識を高らかに表明する一連で、「馬手」「をみな」といった語に象徴される問題意識それ自体が、鑑

賞の鍵となる。凜とした詩情には社会問題の深みまで切り込む鋭さが潜む。

三首目は私性という鍵を拒否するかのような中島裕介の作品。一見普通の短歌に見えるが、実際は引用作品に続いて「もつと正確に」↓「もつともつと正確に」という詞書とともに歌が変奏しつつ繰り返され、最後は実に5行にわたる「正確」な描写の短歌(?)となる。そして変奏は「……違う、そうじゃない」と否定される。「違う、そうじゃない」はネット上で決まり文句的に使われるフレーズ、いわゆるネットミームでもある。

中島の歌集には、ロラン・バルトらの著書の原文を引用しつつ日本語の定型の短歌に翻案する一連もある。純粹に先人の思想として読めばいいのか、翻案する作者の存在を意識すべきなのか。他者の声を作品に響かせることで、例えば「作者」「私性」という、読者の鑑賞の拠り所を揺るがす歌群だ。

歌人は作品の現在地を読者に把握してもらうための鍵をときに明示し、ときに暗示する。様々な規範が相対化された現代の短歌において、目の前の作品が、規範や教養、既存のイメージからどれくらい距離にあるのか。歌人の試行錯誤を前に、私たち読者も安穩とはしてられない。